

## 戦後日本におけるギリシア・ローマ史の歴史

高島 純夫\*

### はじめに

本研究を通じて探究してみたい関心事は、元来、先人がどのようにギリシア・ローマを理解し、何に意義を感じて研究を進めていたか、ということであった。これは、余りにも多様化しているように見える昨今のテーマ設定を少し客観的に、そして歴史的に見てみたいという、いくらか賛同が得られるのではないかと思う個人的関心に端を発している。かつての研究者たちの思いを改めて理解することで、今日の研究を反省的に眺めることにつながるのではないかと考えたのである。

ところで、こうした関心を抱いた場合、かつての研究をまず客観的に把握することが必要となるであろう。そのためには、『史学雑誌』の5月号に毎年掲載される「回顧と展望」がよい導き手になるのではないかと、とは容易に考えつくことである。そこを見れば前年にどのような論文が出されたかが簡単な評価と共にわかる、それを読み重ねて行けばギリシア・ローマ史の変遷がおぼろげながらもわかって来るに違いない、との考えは素直であろう。そこでそれを読み始めたのであるが、読みつづも少しこれらの記事の使い道はないであろうかと考えるようになった。その時浮かんだのが数の分析である。ここには、少なくとも論文に関しては、前年出されたものがほぼ網羅的に取り上げられている。とすれば、それを集計しやすい形にすれば——その時、私の頭に浮かんだのはコンピューター上のカードであった——、何らかの分析が出来るのではないかと。そしてこれによって、戦後日本のギリシア・ローマ史の歴史をなるべく客観的に眺めることが出来るのではないかと、考えるようになった。つまり、最初に述べた関心事、戦後のギリシア・ローマ史の定性的分析の準備中に、定量的分析を思いついたと言えようか。そこで、「回顧と展望」に現れる文献をひたすらカードに採って行くという作業を行うこととなった。しかし、作業を続けて行くと「回顧と展望」には取捨選択がかなりの程度なされていて必ずしもすべての論文が挙げられていないこと、年ごとに基準に違いがあってそのままだとアンバランスが生ずることなどがわかってきた。そのため、いくらかの補正を加えざるを得なかった。たとえば、論文集の形で現れた本を専評に委ねるとして、すべての論文が挙げられていな

\* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学文学部

い場合、それらを論文集に当たってすべてを補ったり、あまりに羅列的に挙げられていて表題の追究には必要がなかろうと判断したものを採らなかつたり——ローマ法関連とついで美術史関係のものにそれが多いが、それでもかなりのものは採録した——、いくらかの補正を施したのである<sup>1</sup>。以上のような準備を整えた上で、先に思いついた定量的分析を試してみたのが以下の第1節である。ついで定性的分析を企てたのが第2節であるが、これは本論文の量の関係もあって、すべてを語ることは出来ないだろう。しかし、いずれもこれまであまりなされたことのない試みであるので、ある程度の意義を主張することが出来るであろう。

### 第1節 定量的分析

「はじめに」で述べたようにして作成したカードは全部で2,400を越える。この中には本も入っているが、もとにした「回顧と展望」には本がすべて採られているわけでもないし、それを新たに集め始めれば大変な手間になるから、ここでは論文を主体に数の分析をすることとした。本になるにしても、その前には論文を積み重ねて行くことが普通だから、傾向の分析のためには論文だけを見ることの方が都合の良いこともある。本を使つての分析は、定性的分析を行う際に実施することにしてしよう。そうとすれば、約2,200の論文が分析の対象となる<sup>2</sup>。

まず、数の変遷を1年ごとに調べて行きグラフの形にまとめたのが図1の3つのグラフである。ついで、それを10年毎にまとめた数で変遷を追ったのが図2である。少し補足しておけば、最初のグラフと2番目以下とは論文数のスケールが違う点、また図2の2000年代とは2000年～2009年のことで、2010年は入っていない点、それぞれ注意を要する。見ればわかるとおり、50年代～70年代は毎年ギリシア史・ローマ史をあわせて20本～25本程度で推移していたが、80年代になると毎年平均40本以上と大幅に増加し、90年代には50本以上、2000年代になると少し減って48本程度というこ

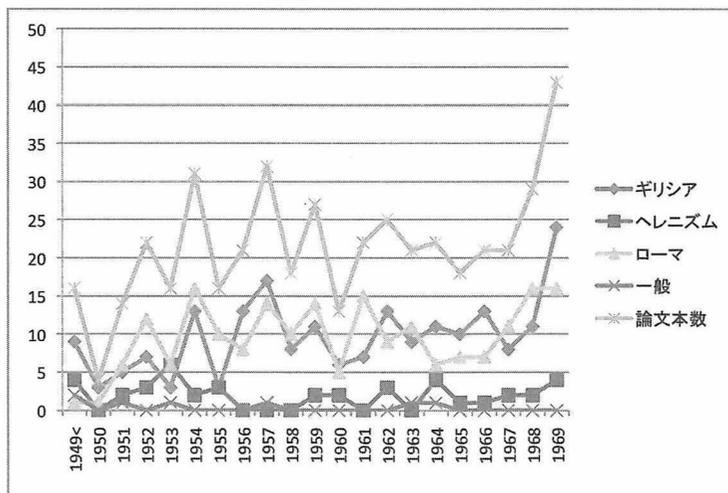


図1 論文数の変遷

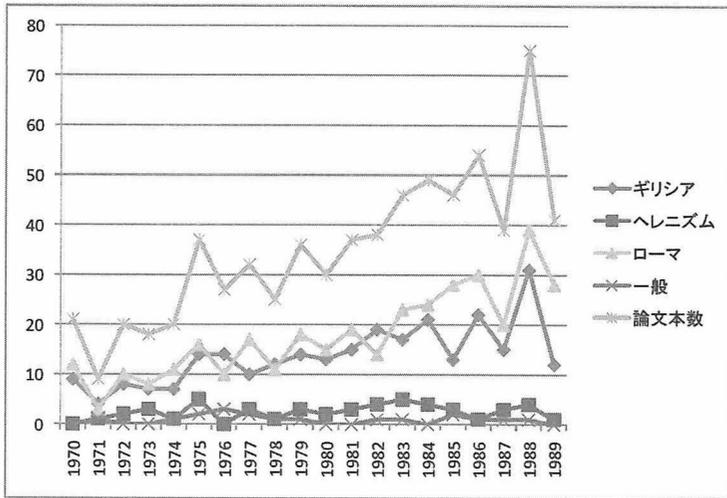


図1-2

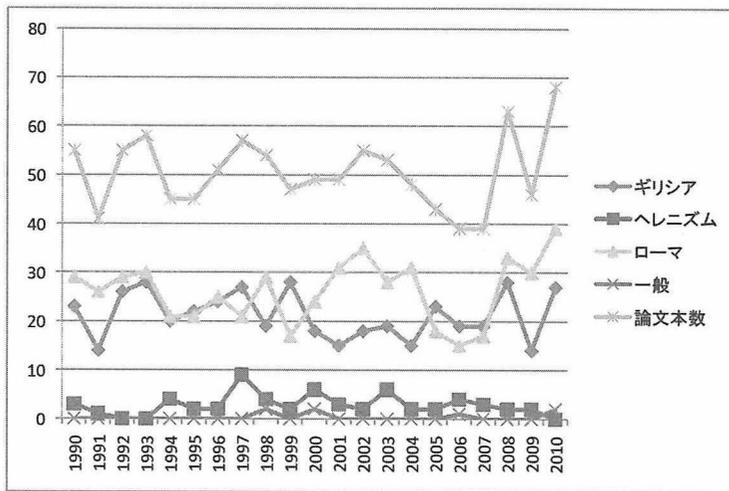


図1-3

とになる。もう少し細かく見れば、1983年から40本を大きく超すことが多くなり、88年に最高の75本に達し、その後も50本程度を維持して行くということになる。要するに、86年末に始まったバブル経済に並行して数の増加が進んで行き、91年のバブル終了後もその状態がしばらく続くと言うことが出来る。

では、どういう人たちが論文を書いたのだろうか。具体的人名に触れての分析は後に回すとして、ここではあくまで数の上から言えることを考えてみよう。まず、この約2,200の論文の筆者として名前の挙がっている人の数は426人である。それぞれの個人が何本の論文を書いているかを調べてみると、1番多い人で49本、1番少ないのは1本である。1本しか論文の挙がらないのは194人である。

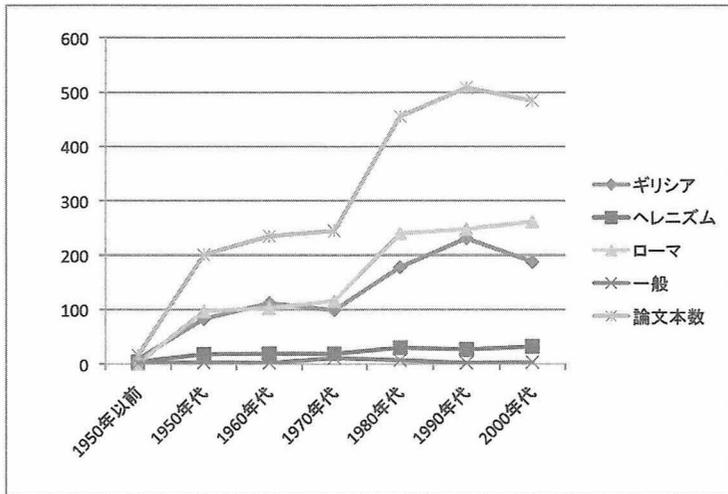


図2 論文数の変遷 (10年毎)

表1 何人によって書かれたか

本数	～10	11～20	21～30	31～40	41～	合計
人数	354	53	12	5	2	426人
人数率%	83.1	12.4	2.8	1.2	0.5	100%
論文生産本数	891	758	299	168	95	2211本
生産率%	40.3	34.3	13.5	7.6	4.3	100%

1本～10本までの筆者の数の合計は354人で、その人たちが作成した論文の数は891本であり、11本～20本までの筆者の数の合計は53人で、論文数は758本ということになる。以下、21本～30本、31本～40本、41本以上の具体的人数と論文数は、表1に示すとおりである。そこには全人数と全論文数を100とした場合のパーセンテージも示している。見ればわかるように、10本までの論文作成者354人で全人数の約83%を占めるが、論文数の上では891本、約40%を占めるのみである。逆に言うと、11本以上を書いている72人、人数の上では約17%の人間が、論文の約60%を書いているということになる。論文の生産数が多い人が本の生産数も多いということが、表全体を眺めると言えるから、おそらくこの約70人、全人数中にすれば約17%の人間が日本のギリシア・ローマ史を引っ張ってきたとすることが出来るであろう。

つぎに、ギリシア史とローマ史それぞれの論文数の変遷についてみてみよう。要するに、図1と図2から読み取れることであるが、最初はギリシア史の方が総じて多くの論文が書かれている状況であったが、1970年代に入るとローマ史の方が多くなり始め、その後多少の入れ替わりはあるが、その状態が定着していくということになっている。その様子がよくわかるのは図2であり、表2にその基となった数字を挙げた<sup>3</sup>。ここから窺われるのは、ギリシア史の方は1990年代に数の上では最高になり、それ以後は減少に転じているようだということ（バブルの崩壊？）と、ローマ史の方は依然数の増加を維持しているようだということであろうか。この数の増加を維持しているというのは、ロー

表2 論文数の変遷（10年毎）

	1950年以前	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	合計
ギリシア	9	83	112	99	178	232	187	900
ヘレニズム	4	18	19	19	29	27	32	148
ローマ	1	97	103	116	241	248	263	1069
一般	2	3	2	11	7	2	3	30
論文本数	16	201	235	245	455	509	484	2145

マ史の大きな特色となるようであるが、それについては後述することとして先に進もう。

つぎになすべきことは、作成したカードから内容的に言えることを考えることであろうが、これはなかなか難しいことである。そうしたことをなすには、論文の分類が必要になってくるが、それが簡単な作業ではないことは、少しでも論文の実際を思い浮かべれば明らかであろう。ギリシアとローマとの時代的区別は何とか出来るとしても——それも出来ない場合が稀に生ずる——、ヘレニズムになると純粋にヘレニズム時代に分類するほかにギリシア・ローマのどちらかに分類した方がよさそうなものが出て来るし、奴隷制を論じたものなどではどこに分類すれば良いのかわからないものも出て来る——これについては「一般」という分類を作ることにした——。さらに、政治史、経済史、社会史といった分類も、そうしたものにきれいに分類できるものの方がむしろ稀なのであって、そうした分類はあまり意味がないようにも思われる。何とか出来る分類は、ギリシア史に関してはミケーネ、アーケイック、古典期という時代区分と<sup>4</sup>、アテナイとそれ以外という対象上の分類であり、ローマ史に関しては、共和政期、帝政前期、帝政後期という時代区分であろう。しかし、いずれにしても重なり合うものもあるし、これらの分類とは無縁のものも多く出て来る上に、すべての論文を中味について詳しく点検し得たわけではないから、全論文の截然とした分類の上での分析ではないことをお断りしておかねばならないが、以下簡単にその結果と若干の分析を報告しておきたいと思う。

表3 ギリシア史の場合の対象時期、「ミケーネ・アーケイック期」と「古典期」との割合

	1950年代		1960年代		1970年代		1980年代	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合	本数	割合
ミ・ア	25	1	50	1	41	1	49	1
古典期	35	1.40	55	1.10	52	1.27	108	2.20
	1990年代		2000年代		全体			
	本数	割合	本数	割合	本数	割合		
ミ・ア	51	1	24	1	240	1		
古典期	139	2.73	125	5.21	514	2.14		

まず、ギリシア史について、ミケーネ期とアーケイック期とを合わせたものと古典期との対象時期の対比であるが、これについてはすべてを合計して百分比を出すと32対68という結果が出る。これを10年毎の時代順に並べ、ミケーネ・アーケイック期を1とした場合の古典期の割合を示したものが表3である。これを見れば、50年代～70年代は両者の数が拮抗するか若干古典期の方が多いと

いった程度であったが、80年代から古典期の数がミケーネ・アーケイック期の数を倍するようになり始め、2000年代から5倍以上になるということがわかる。この原因は、ミケーネ・アーケイック期の研究の減少にあることは数字から明らかである。中に踏み込んで眺めてみれば、とりわけ最近におけるミケーネ時代の研究の数の減少は顕著で、いまでは考古学の立場から王権・社会のあり方をこれまでの見方を批判する形で論ずる周藤芳幸と、それを受けながらも周藤とのあいだに齟齬はないとしてこれまでの考え方を堅持する山川廣司との二人しか論者は見当たらず、線文字B文書を用いての研究となると山川一人が孤塁を守る形となっている。

表4 ギリシア史の場合の対象地域、「アテナイ」と「その他」との割合

	1950年代		1960年代		1970年代		1980年代	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合	本数	割合
アテナイ	34	4.86	55	2.62	58	1.81	115	3.11
その他	7	1	21	1	32	1	37	1
	1990年代		2000年代		全体			
	本数	割合	本数	割合	本数	割合		
アテナイ	123	2.02	90	1.91	475	2.32		
その他	61	1	47	1	205	1		

ついで、アテナイとそれ以外との対象地域の区分については、先と同様に百分比を取るとほぼ70対30というきれいな数字が出て来る。これを先と同様に時代順に並べアテナイ以外を1とした場合のアテナイの割合を出したものが表4である。アテナイ以外で対象となっている主要なものは、ミュケーナイ、ホメロス世界、スパルタ、マケドニアなどである。前2者は時期区分の場合と重なってくるから、その要素を取り去るために、古典期に限って同様に変遷を追ったのが表5である。眺めてみれば、要するに、アテナイ一辺倒と言って好いような状態であった1970年代までの状況が、80年代以降少しづつ変化し、2000年代になると4分の1近くがアテナイ以外の研究であるという状況になってきたことを示している。具体的な研究を見てみると、古山正人のスパルタ、古山夕城のタソス、阿部拓児のペルシア研究などが目につく。

表5 ギリシア史における「古典期」を対象とした場合の「アテナイ」と「その他」との割合

	1950年代		1960年代		1970年代		1980年代	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合	本数	割合
アテナイ	25	5.00	46	6.57	48	16.00	96	6.00
その他	5	1	7	1	3	1	16	1
	1990年代		2000年代		全体			
	本数	割合	本数	割合	本数	割合		
アテナイ	109	5.74	84	3.11	408	5.30		
その他	19	1	27	1	77	1		

表6 ローマ史の場合の対象時期、「共和政期」「帝政前期」「帝政後期」の違い

	1950年代		1960年代		1970年代		1980年代	
	本数	割合	本数	割合	本数	割合	本数	割合
共和政期	20	1	46	2.30	42	2.10	80	4.00
帝政前期	29	1	30	1.03	41	1.41	86	2.97
帝政後期	40	1	21	0.53	21	0.53	52	1.30
合計	89	1	97	1.09	104	1.17	218	2.45

	1990年代		2000年代	
	本数	割合	本数	割合
共和政期	86	4.30	68	3.40
帝政前期	69	2.38	117	4.03
帝政後期	74	1.85	54	1.35
合計	229	2.57	239	2.69

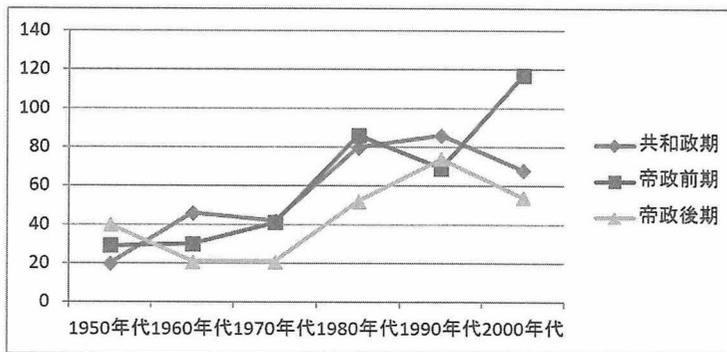


図3 表6のグラフ表示

つぎにローマ史について、時代区分が可能なものをその論文の力点が置かれている時代を探し、領域をまたいでいて決め難い場合は若い方に分類するという原則を立てて分類してゆくと、1950年代以降の全体での共和政期・帝政前期・帝政後期の百分比は、35対38対27ということになる。しかし、ローマ史の特色をよく示すのはそうした三つの時代の比率ではなく、それぞれの時代の数がどのように変遷したかではないかと思われる。表6に示したのが、そのわかる表で、各時代について1950年代の論文数を1とした場合の割合をそれ以降の年代については出している。それをグラフの形にしたのが図3である。これらを見て気づくのは、帝政前期の2000年代での増加と、帝政後期についての変遷の激しさであろう。帝政前期の増加は、ギリシアを含めてそのほかが同じような減少のパターンを辿っているのに比べて特異であり、2000年代にローマ史全体が増加する原因となっている。その原因を数の上から探してみると、要するに論文を書く人の数の増加ということになるものと思われる。それを示すために作ったのが表7で、この三つの時期区分の中に入っている論文が何人の人間によって書かれているかを示したものである。さらにその下に参考のために、ローマ史全体の論文とギリシア史の全論文が、それぞれ何人の手によって書かれているかを示したものである<sup>5</sup>。見れ

表7 何人の人間が論文を作成したか

	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
共和政期	15	20	16	33	31	27
帝政前期	16	14	18	34	30	48
帝政後期	11	10	12	29	30	30
ローマ史全体	33	40	45	95	93	109
ギリシア全体	38	34	47	67	63	63

ばわかるように、帝政前期の論文を書いた人間の数が2000年代にぐんと増加しており、それがローマ史全体に関わる数を押し上げる結果となっている。具体的研究を見てみると、帝政前期の研究としては、組合あるいはコレギアの性格やそれにまつわる法を追求したものや<sup>6</sup>、ある女性に関わる訴訟記録に基づきつつ考察を進め自由人身分の曖昧さを指摘したものや<sup>7</sup>、剣闘士競技や円形闘技場の社会的役割を追究したもの<sup>8</sup>、エジプトの1村落テプテュニスにおける文書館グラフィエオンの性格を考察したもの<sup>9</sup>、など実にさまざまである。見るところ、この時代に関わる豊富な史料が、これまでの研究の積み重ねなどがあって非常に利用しやすくなったという背景があるようである。さらにそれに加えて、ピーター・ブラウンに発する古代末期に対する関心がわが国にも及んできているということがあろう。南雲泰輔の解説論文等が教えるところによれば<sup>10</sup>、「古代末期」とは多面的性格を持つものであって、そのため多くの部分で研究を刺激し、人を引きつけているということなのであろう。また、帝政後期の1980年代以降の数の増加もこのことから説明出来るであろう。それまでの帝政後期の研究は圧倒的にキリスト教にかかわるものが多く、それへの関心は時代を追って弱まる傾向があったのであるが、1980年代以降になるとそれ以外のさまざまな面にまで研究の幅が広がり、その後もその傾向が止まらず数が増加して行くこととなっている。こうして今や、ローマ史は隆盛の期にあるかのように見える。

以上が、作成した表を眺めて数について言えることである。苦心した表に囚われて、粘りすぎた感がなくもないが、ともかくこれが私の眼に映った数の上から見た変遷と現状である。ついで、この表を参考としつつ、冒頭に掲げた関心事を探究すべく、内実に踏み込んだ分析を試みたいと思う。

## 第2節 定性的分析

### (1) 初期の3人と戦後の混乱期

さて、作成した表を年代順に並べて初期の頃を目につく名前を見てみると、まず栗野頼之祐、高山一十、村川堅太郎の3人が挙げられる。

栗野は1950年に出版されたそれまでの研究をまとめた本の中で、自身の研究課題と研究の意義についてつぎのように言っている<sup>11</sup>。

「(ギリシア史、ヘレニズム史研究を通じて) 恆に著者の脳裏を去来して止まない命題は、いかなる精神からかかる文化が発生し、果していかなる歴史過程を経て、往昔エーゲ海の一角に発生した地方的ギリシア文化が、のち泰西諸文化の教師となり、今世界文化の主導規範となるような歴史

的必然を将来したのであるかということである。・・・ともあれ、ギリシア文化の研究は、現在多難な日本再建を荷っている人たちにとっても、また極めて示唆に富む主題であろうかと考える。特に高邁な理想を唱えたペリクレスの日のアテナイが、やがてシラクサに破れ、ペロポネソス戦にひしがれて、悲運のどん底にあり乍ら苦い自己反省に専念し、ひたすら内面生活を掘り下げ、ついにツキュディデス、プラトン、イソクラテスを生み、アリストテレスを育み、デモステネスを出したのではなかったか。しかも、忘れることが出来ないのは、これら偉人のいずれの作品にも見られる共通の現象は、彼らが厳正なアテナイ批判に終始していることである。]<sup>12</sup>

ここには「ツェノオン草紙文書」「ツェノオン草紙文書に現われたる麦酒業事件」「アテナイの図書館とその発掘碑文」「安息王アルタバノス3世王令のギリシア碑文について」「古代ギリシアの戦没戦士を弔祭する制度について」の5つの論文が収められている。関心の主体は、それぞれゼノン・パピュルスに現れたプトレマイオス朝初期の社会経済や日常生活の実状、ゼノン・パピュルスから復元できる収税吏の不正事件の顛末、アテナイにおける図書館の発展、パルティア王の王令から窺われる紀元後1世紀のギリシア都市スサの実態、アテナイにおける戦没戦士に対する扱いということであり、著者の関心に沿って何らかの共通の問題を立てての系統的追求といった趣はない。いずれにも共通するのは、それまで日本ではあまり使われていない（あるいは知られていない）碑文ないしパピュルス史料を使い議論の支えとしていることで、そこから表題は生まれたのであろう。内容は時として史料の紹介とそれに付随する問題の指摘のみに墮することがあるとしても、主要な点では欧米の先行研究に負いつつパピュルスなり碑文なりの独自の読みによって新たな知見を提供しようとするもので、書評や「回顧と展望」で非常に高い評価を得たのも無理からぬところである<sup>13</sup>。しかし、この5篇は「海外研鑽数十年」<sup>14</sup>を経て「すべて留学中に出来た」<sup>15</sup>ものであって、留学がまだ難しかった当時あって、多くの者が真似ようもない成果であったと言わざるを得ない。さらに著者は、自ら設定した上記のような課題と意義を正面切って論ずることはなかったし、この研究が「多難な日本再建を荷っている人たちにとって」どのように「示唆に富む」のか具体的に指摘することもなかった。この書が羨望の眼で眺められることはあったとしても、彼の研究手法、研究成果が後に続く者に幅広い影響を与え得たとは思われない。

高山は1970年にそれまでの成果をまとめた1書を公刊している。その「あとがき」に彼は以下のように記している。

「わたくしはギリシア史の追求のうちに、常に人間の探究という歴史学の本質を問い続けることを怠らなかつた。・・・わたくしは、思想ないし意識と現実との交錯・連関に歴史研究の視角をおき、とくに社会意識の顕在化ないし具体化に焦点をしばる社会史を構想した。そして、わたくしはギリシア人の知恵を彼らの社会意識に求めて、ギリシア社会史の叙述を意図してきた。・・・もとより、(本書は) 論文集であるところから必ずしも体系的ではない。しかし、そこには、わたくしの社会史の概念が貫かれているはずである。ギリシア社会史は、人間の社会性を重んずるギリシア人の生活の知恵を示してくれる。その知恵こそ、ギリシア＝デモクラシー維持のための知恵であっ

たと言わねばならない。』<sup>16</sup>

見るように、彼は独自の社会史を追究しているが、その社会史は高田保馬社会学に則った社会理解に基づきつつ、その社会学の前提からギリシア社会を見ようとするものであって、ギリシアの史料から発してその社会のあり方を見ようというものではなかった。例えば、アゴラの社会とアクロポリスの社会という概念を立て、その定義として「アゴラは氏族時代にその起源を持ち、血縁社会的のものであるのに対して、アクロポリスはポリス時代に属し、地縁的・政治社会的のものである」<sup>17</sup>と言い、ヘロドトスの社会史観は血縁的社会に由来する人間的愛情と習俗についての記述が多いからアゴラ的であり、トゥキュディデスのそれはアクロポリス的と言えると両者の違いを指摘し、それが時代による変化だとする。アゴラ的社會とアクロポリス的社會という対比を前提としてヘロドトスとトゥキュディデスの記述の適当な箇所を取り上げて両者の違いだと言っても、それが両史家の社会史観——どういふものか明瞭ではないが、これがあとがきに言う「社会意識」にあたるものであろう——のすべてだと証明されていないことは明らかであるし、ましてやアゴラ的社會とアクロポリス的社會の存在を証明することにもならないであろう。要するに、ある観念を前提として両史家を見てみると違いを指摘でき、それは時代による変化に違いない、という託宣のような論文であって、そこに「ギリシア人の知恵」を感じることが出来ない。その他の論文も大体同じようなもので、これらから「ギリシア＝デモクラシー維持のための知恵」を読み取ることは相当難しかろうし、これがその後続く研究者に大きな影響を与え得たとは思われない。

これら二人に対して、村川の行き方はずいぶんと異なっていた。彼の研究は、史料の徹底的読みと関連研究の幅広い渉猟・撰取とを特色とする。例えば、『羅馬大土地所有制』というのは社会構成史大系の1分冊として出された400字詰で300枚を優に超す、註を入れればおそらく400枚に達するであろう長い論文で、基本的にはカトー、ウェアッロ、コルメッラの農業書に基づく大土地所有経営のあり方の分析であるが、内容ははるかにそれ以上のものを含んでいる。彼はまず、19世紀後半以降の学説史を3群に分けて紹介した上、本論で使う概念を明確にする。その上で、使える史料を検討し、先の三つと大プリニウスとが主要な史料となるが、とくに先の三つを中心として記述すると宣言し、まず直営地について穀物栽培、牧畜、果樹栽培の三つに分けて考察する。ついで、大土地所有制のもうひとつの柱である小作地について考察を進めようとするが、先の農業書にはそれについて記述が少ないが、そのことが現実の軽重を必ずしも反映しないと指摘して、今度は *Digesta* を主要史料として実態解明に努めることとなる。しかもそれで終わりではなく、今度は本研究に「最も価値ありと愚考」していた史料を故意に残しておいたとして、小プリニウスの書簡を検討の俎上に載せ、そこから窺える大土地経営のあり方を考察する。そうした上で社会構成上における大土地所有の位置を考察し、むすびに至るのであるが、ここまでで200枚を超している。しかし、これはイタリア本土についての考察の終わりで、最後に「・・本来ならばイタリアの何倍かの紙幅を要すべき属州の記述を、あたかも附録の如くに扱わざるを得なかったことを読者にお詫びする次第である」と断った上で、今度は属州についての考察に移り、アフリカについて主として4枚の碑文をもとに考察を進めることとなる。そ

して、その他の属州についても軽く触れた上、附録としてキケロのウェッレース弾劾をもとにシチリアの状況を探る考察と、最近気づいたとしてキケロの『義務論』の中の一節とロンゴスの『ダフニスとクロエー』について考察した2編をつけている。先行の研究を消化した上、あくまでも史料に基づき考察を進めるそのやり方は強い説得力を生み、その精密さ周到さは読む者に大きな感銘を与えるだろう。しかもその史料は日本において接触不可能なものではなく、かなり前から取り入れられ、読もうとすれば（ラテン語・ギリシア語を解する限り）いつでも読める類のものであった。彼の研究スタイルが模範として後に続く研究者に大きな影響力を持ったのは当然であったろう。彼の研究活動はその後も長く、1991年の死の直前まで続いたが、ローマについてふたたび深い言及をすることは最後の「市民と武器」までなかった。しかし、ギリシア・ローマの市民を「古代市民」として一括して扱えるような一つの特異な人間類型と見ることが出来る、と考え続けていたことは他のところからも明らかであり<sup>18</sup>、彼にとってギリシアとローマが同質の社会であるという考えが揺らぐことはなかった。

ところで、村川は戦後の混乱期であるこの時期、立て続けにこのような研究を発表していったが<sup>19</sup>、それらの執筆事情について1987年の著作集のあとがきに以下のように言っている。

「これら諸篇の書かれたのは戦後の、まだ『学問的鎖国』の時代であったが、ともかくも筆者がこれを書き得たのは、実は戦争中から社会構成史的な内容の講義を行なっていたからだった。12月8日の対米英開戦の日に私があたかも何事もないように古代末期の *coloni* のことを論じていた、という伝説が生まれていたことをずっと後になって知ったが、・・・この噂の立つような潜在的「非国民」であったのは事実である。そのおかげで戦後の窮乏の中で欣んで筆を走らせ得たのであった。」<sup>20</sup>

しかし、ここに見られるように、戦中にながしかの学問的蓄積を果たし得、戦後の混乱期に「欣んで筆を走らせ」ることの出来た村川は例外的存在だったろう。1945年から50年代前半のこの時期、ほとんどの研究者は、新しく入ってきた西洋の研究成果の摂取に汲々としていたと思われる。『史学雑誌』を始めとしてさまざまな雑誌にこの時期、多数の紹介論文が書かれていることがそれを物語っている。そうした論文の執筆者として名前がよく出て来るのは、井上一、秀村欣二、渡辺金一といった人々であった。井上は1949年に2つの論文を発表以来54年までに6つの、秀村は51年初出で同じく54年までに7つの、渡辺は51年初出で同年と53年に合わせて5つの論文が採られている。49年～54年までに採られた全論文数94本の中で栗野、高山、村川3人のものが19本に対して、この者たちのものが18本であり、この他に書評などがあるから、欧米の動向紹介において彼らの果たした役割は大きかったと言えよう<sup>21</sup>。

## (2) 理論の摂取から発展へ

そうしたギリシア・ローマ史に関わる個別的論点の紹介が進む一方で、マルクス、ウェーバーの理論の摂取も進んでいた。戦前の史学への反省から、科学としての歴史学への欲求は強く、ギリシア・

ローマ史の分野でも世界史の法則を踏まえた上での研究、ないしは世界史の法則をより明らかにするための研究がなされるようになり、新たな研究分野が開かれていったと言える。この動向の中心にあり、1990年代まで旺盛な活動を続けることとなる3人の名前がとくに50年代後半から頻繁に現れ始める。すなわち、太田秀通、弓削達、土井正興の3人である。太田の初出は1951年、先に述べたような海外動向の紹介論文の筆者としてであるが、彼については33本の論文がカードに取られている。この数は弓削、土井に比べて少ないが、彼の場合本の形の著書の本数が12冊と断然多くなっている。弓削の初出も1951年で、論文数としては49本でこれは今回カードをとった中で最大の数であった。著書は単著だけで6冊が挙がっている。土井の初出は少し遅れて1957年で、論文数としては46本を数え、これは今回2番目の数であった。彼にはまだ、論文の翻訳が数点あり、共著の形の論文も1つある。著書としては6冊がある。いずれにしても、この3人が旺盛な研究活動を続けたと言い得るであろう。では、その研究はどのような特色を持っていたのだろうか。

太田はすでに1952年、「ホメロスにおける英雄について」を書いて独自の歩みを始めている。ここで太田は、ホメロス社会を原始社会からポリス社会へと移る過渡期、階級の無い社会から階級と身分とが成立してくる社会であるととらえ、この変化を生み出した矛盾のあり様を土地所有形態と王の性格とについて探っている。しかし、すぐに彼の考えにとって衝撃的な出来事が起こった。すなわち、1953年9月のJHS論文で線文字Bがギリシア語として解読出来ると報告されたことである。原始社会から直線的にポリス共同体が生まれてきた、そしてそれがアジア的共同体ともゲルマン的共同体とも異なる特色であると理解していた彼にとって、ホメロス以前と思われるミケーネ時代にまでギリシア社会が遡ることは想定外のことだった。それは、「原始ギリシア人の共同体的性格」<sup>22</sup>を書いていた村川にとっても同じことで、彼がこの解読を受けて渡英を決意したことも<sup>23</sup>、太田が線文字Bの研究に向かったことも自然の流れとして理解できる。太田は早くも1954年の『史学雑誌』の11号に、その年の春までの動向を踏まえて解読についての解説論文を書き、そこでホメロス社会との関係についても考察を進めている。しかし、彼の考えがより明瞭な形で現れたのは、1959年の『共同体と英雄時代の理論』においてであった。そこで彼は線文字Bから浮かび上がる社会とホメロス社会との共通性を指摘しつつも、それはホメロスの中に新古の層があるからであり、土地所有形態を見れば両方の社会の違いは歴然であるとして、ミケーネ社会をアジア的生産様式の初期段階と見ている。そのため、暗黒時代がポリス社会を生み出す重要な時代ということになる<sup>24</sup>。1968年の『ミケーネ社会崩壊期の研究』になると、暗黒期の意義は変わらないが、ミケーネ社会の諸矛盾を探ることでミケーネが崩壊して行く原動力とポリス共同体を生み出して行く原因を探ろうとするようになっていく。そして、1973年夏の日付の入った増補版『共同体と英雄時代の理論』の補足では、ミケーネ社会をアジア的生産様式の第1段階に帰属させたことは誤りであったとし、古典古代的共同体の形成過程の線上で捉えるべきであったとしている。さらに1977年の『東地中海世界』になると、アジア的共同体と古典古代的共同体の間に「ミケーネ的共同体」という概念を創出することとなっている。このように、古代オリエント全般を含む幅広い研究成果の摂取とともに、自らの実証研究の成果に照らしなが

ら理論を鍛え直して行くというのが彼の研究スタイルであった<sup>25</sup>。しかし、実証研究は常に今までのものがない新たなものを明らかにしたから、彼の理論はさまざまな偏差を中に含み込むように複雑化していく傾向があった。たとえば、実態に合わせて隷属農民という範疇を設定することにより、古代世界を奴隷制社会とする一般の見解に風穴を開けようとしたが、この風穴はまた理論を複雑化して理論の存在意義を失わせる危険性を持っていたように思われる。しかし、いずれにせよ彼の根本にあった問題関心は常に一貫していたと考えられる。それはすなわち、1952年の論文に現れていた、原始社会からポリス社会が発展してくる過程を科学的に、つまりいくつかの原理に還元される法則に基づいて明らかにする、ということであった。そして、その意義は第一義的には世界史の法則を明らかにするということであろうが、その奥には、これまた52年の論文に現れていたように、ポリス形成の過程に現れる「人間がそれまで経験したことの無い混乱と不安と動揺」は、法則が必然ならしめる「階級支配が国家権力によって貫徹されている社会から、階級のない社会へと人間が脱出して行く時代に対比されるような」時代的矛盾に由来するのであるから、それを知っておく意味があるのだ、という考えがあったのに違いない。おそらく彼は、2000年の12月に亡くなるまで科学としての歴史学とそれの指し示す法則とを信じ続けたであろう。しかし、その頃には「言語論的転回」といったことが声高に言われ始め、彼が信じた法則は一場の夢、という言い方が悪ければ一つの物語に貶める考えが幅を利かすようになっていた。さらに、彼の正確さを求める粘り強い思考は、晦渋な文体を生んでいたし、その上最近では、ミケーネ社会をアジア的専制体制に近いものと見る見方は近代ヨーロッパ人の偏見から出たものだとし、ミケーネ社会をむしろホメロス社会に近いものと理解しようとする、太田の血の滲むような努力を壮大な回り道にしてしまうような有力な見解も出ており<sup>26</sup>、彼の影響力は今日急速に衰えているように思われる。今日ミケーネ時代の論文が少ないことは最初に述べたとおりである。

つぎに弓削を見よう。彼の最初の論文は、「最近に於けるホメロス研究の一傾向」というものであった。これはアレクサンドリアの文献学者を批判したホメロス統一論者の著作の紹介論文であるが、おそらくエウセビオスの文献伝承のあり方を考える中で行きあたった本だったのだと思われる。翌年から、ローマ帝政後期のキリスト教に関わる研究が陸続と現れてくる。しかし、彼はその一方で、ウェーバーを中心とする理論の摂取にも努めていたらしい。54年から57年にかけては、後にウェーバー学者として名を知られるようになった内田芳明と、ウェーバーのオイコス概念を中心として問題が広がって行った論争を展開し、59年には渡辺金一と共訳でウェーバーの『古代農業事情』の翻訳を刊行している。彼のローマ史に関わる成果は、取捨選択されて1964年に『ローマ帝国の国家と社会』として出版された。その「あとがき」で、「本来は、4・5世紀の精神史、ことにキリスト教の発展と末期ローマ異教との交渉に興味をいだいてきた」けれど、と自らの関心を説明する。そのためには、「後期ローマ帝国の国家と社会の構造を全体として明らかにするという課題」を課さざるを得ず、その過程で成った諸論文のうち、国家・社会史関係のものだけを集めたのが本書だといえる。こうした課題を課した場合、なすべきことの一つは、ウェーバーが古代オリエンととともにラ

イトゥルギー国家の概念で捉えた後期ローマ帝国をどう捉えるべきか今一度検討することであり、今一つは、ポリス共同体として始まった共和政ローマが如何にして他共同体を支配する支配共同体となり得、どのように変質して後期ローマ帝国へと到ったかを明らかにすることであろう。この本は、一見すれば、彼が本来関心の中心になかったと言う、「ローマ帝国の国家体制と社会構造をそれとして考察」している印象を受けるが、よく見れば先の課題設定に沿って苦闘した跡が見える構成となっている。彼はその後多くの論文と、啓蒙書を含む多くの本を執筆することとなった。啓蒙書における彼の関心は、ローマをできる限り具体的な形で読者に示すことと、ウェーバーに学び独自に発展させた歴史あるいは社会に対する原理的見方を解説することだった。

ここで少し脱線して、私事にわたる話をすれば、私は弓削が東大に移った最初の年の駒場での授業の受講生であった。その授業はいろいろな意味で印象的なものだったが、その中で強く印象に残っていることに、ウェーバーの言う Wertfreiheit を「没価値性」と訳してはいけない、「価値自由」と訳さなければならないということがあった。人間はある価値観を持って見るのでなければ、無限で多様な社会を見ることはできない、あらゆる見方は価値の上に成り立つのであって「没価値」となることはできないのだ、唯一客観性を保つ道は自らの価値を自覚して客観化し、その価値から自由になることだ、それがウェーバーの言いたいことである、そう弓削先生は教えられた。そしてこの考えが、彼のライトモチーフとしてあらゆるところに顔を出しているのを私は見出す<sup>27</sup>。

さて、彼の学問的関心のうち、後期ローマ帝国の国家・社会をどう捉えるかという問題については、その後あまり進展がなかったが——と言うより、同書に入れられた土井正興の批判に対する回答から見ると、ライトゥルギー国家と捉えることにもはや異論を見出さなかったため再論されることなく<sup>28</sup>、と言った方が正確かも知れないが——、共同体と支配の問題は何度か再論され、晩年になると先の本では省略されていた精神史への関心が世界平和の問題とともにふたたび頭をもたげて来ている。1977年に出された『地中海世界とローマ帝国』は、最後にまとまって共同体とその発展について述べた本ということで注目される。彼がここで立てた問題は、『地中海世界』とは、どういう意味で一つの『世界』なのだろうか、つまりギリシア・ローマ世界を一つの「世界」と理解できるのは何故かということであった。このことは、このころにはすでにギリシア・ローマを一つの世界と捉えることへの疑問が出始めていたことを示すであろうが<sup>29</sup>、これに対する彼の答えは、共同体の「運動法則」つまり発展の仕方が共通するのだということで、彼はこの共同体を「市民共同体」と呼んだ。この考えに対しては多くの批判が出た。その一々を検討している暇はないが、これに対して彼が答えた文としては、1988年の短い一文しか私は見出していない<sup>30</sup>。要するに、彼が具体化して述べている課題、それはつまりギリシアとローマを同じ世界と捉えて世界史の中に位置づけようとする課題という風に読めると思うが、そうした課題を設定する限り、自分の試論が「欠陥は多くとも、ほとんど唯一の試みの方向である」というのである。おそらく言いたいことは、ギリシアとローマを同一の世界と見ない、そういう価値観が出て来ても一向構わないけれど、それらを同一の世界と見ようとする、自分と同一の価値観に立つ限り、私のやり方が唯一のやり方となるだろう、ということだ

あろう。そこには自らの方法に対する自信とともに、自らの価値観がもはや有用性を持たない日が来るかも知れないという諦観も込められているように思う。ウェーバーに学び、価値を没しさることでなく、価値を常に意識することを心がけた彼にとって、学問的価値観が変遷することは当然のことだっただろう。ここに、法則を信じた太田とは違った彼の信念があったように思う。そして、より普遍的と思われる価値を求めて精神史と平和の問題へと向かい始めた、というのが私の弓削理解ということになる。今日、ギリシアとローマとを同一性の中に理解しようとする関心は衰えていると言えるだろうが、それがふたたび起こることがあったなら、弓削の研究は、おそらく彼が考えていたとおり、ふたたび脚光を浴びることとなるだろう。

最後に土井である。土井の最初の論文は「オストラキスマスと古代民主政」というものであった<sup>31</sup>。ここで彼はオストラキスマスと民主政との関わりを論じているのであるが、それは論じているというよりも、簡明にして一言で言えば、想像しているのである。「貴族」「民衆」「奴隷所有者」「商工市民」といったいくつかのキー・タームに基づきつつ、それらの存在がオストラキスマスをどう扱い利用したか、想像しているのである。それは、たとえば、後半の註のあり方を見ればよくわかる。註にはそれまでも少なかった研究文献への言及がほとんど無くなり、史料箇所の提示ばかりになる。しかもその史料箇所提示は、彼の想像する筋に合うようなエピソードが現れる箇所の提示でしかない。先行研究に基づき、そう捉えられるかを議論するのでもなく、史料をさまざまに検討してこうした解釈が成り立つ所以を説明するのでもなく、わずかの史料を基にこうであろうと彼は想像するのである。しかし、その想像の背景には、彼が苦勞した生活のなかから獲得し信念にまで昇華しつつあった歴史に対する見方があった。それは一言で言えば、史的唯物論ということになろうが、その信念があるからこそ彼の想像は一定の強さを持っていたと言えよう<sup>32</sup>。そして、この処女論文のスタイルは、それ以後の彼の研究スタイルとして定着する。土井がその後研究に意欲を燃やした奴隷反乱は、イエス・キリストを含めていずれも史料に限られ、大まかな流れはわかっても細かなことについてはほとんど何も言い得ぬことばかりであった。彼はこれを、彼の信念に発する想像によって解こうとした。それは力強さを伴ってある人々を説得しただろうが、とくに信念を共有しない者にとっては独断に映ることとなった<sup>33</sup>。しかし、彼はこうした批判に鈍感であったわけではない。批判を打ち返す手段として彼が取ったのは、絶え間なくさまざまなことを撰取して行くことだった。絶え間ない撰取は、必ずしも実証力を高めなかったが、議論を分厚くし、彼の信念をますます確かなものとする方向に作用した。彼にとって、研究の進展は自らの信念が確証されて行く過程であった。そうした研究と信念との幸せな融合の、最初の大きな成果が、1969年の『スパルタクス反乱論序説』である。

スパルタクスは、以後彼の生涯のテーマとなったが、93年の死を経て翌年の出版となった『スパルタクスとイタリア奴隷戦争』と読み比べてみれば、両者のあいだに論ぜられる実証的問題にほとんど差はないことがわかる。すなわち、主要な問題としては再南下の問題——ガリア・チサルピナに到達したスパルタクス軍が再び南下し始めた問題——と、最後の戦場の問題との2つである。しかし彼は、25年を隔ててなおこれがまだ自分の研究の「中間報告にとどまらざるをえない」(408頁)と

言っている。その原因は、『序説』公刊後外国のスパルタクス研究者とのつながりによって新たな見方に目を開かれ、トラキア情勢などを考える必要が生じたからであった。この間、彼の絶え間ない撰取の努力は、外国との結びつきを生み、東欧圏の学者との交流を通じて新たなものの見方との接触に至っていたのである。こうした撰取の努力は、わが国におけるさまざまな研究についても然りであり、それは1984年の『古代奴隷制社会論』などを見れば明らかかであろう。彼はまた、弓削、太田のよき理解者であり、2人を調停し今後行くべき方向を指し示す役割を持っていた。こういうあらゆる者を受け入れ、調停して行く能力があったからこそ、外国との結びつきも彼のおかげで深化させることが出来たように思われる。

### おわりに

許されている枚数から見て、これ以上の展開は出来そうにない。後は、これ以後のことについて考えてみたいと思っていたことを若干述べて終わりとした。まず、図1のグラフからわかるように、1969年に最初のピークが来る。これは岩波講座の『世界歴史』と村川教授還暦記念の論文集『古典古代の社会と思想』と出たためであったが<sup>34</sup>、今まで述べてきた3人以外の研究について、何らかの傾向を指摘できるであろうか考えていた。おそらく、史料への向き合い方と問題の捉え方に何らかのことが言えるだろうと思う。つぎのピークは1988年に来るが、これは多くの雑誌論文が書かれたことと、弓削・伊藤編の『ギリシアとローマ』および弓削・土井編の86年1月に裾野市で開かれた国際シンポジウムのプロシーディングズが出されたためである<sup>35</sup>。両者について言うべきことが出て来るように思うが、とくに私も執筆者の1人になっている『ギリシアとローマ』については、その時は感じもしなかったが、今から振り返ってみるとバブルのまっただ中に屹立しているような本で、これと2010年に出た桜井・師尾編の『古代地中海世界のダイナミズム』と対比して言うべきことが出て来るように思っていた<sup>37</sup>。しかし、それは他日を期すほかない。

<本稿は2011年11月12日に立教大学で行われた西洋史研究会大会で報告した原稿に加筆・修正を施したものである。>

### <註>

- 1 その他に「論評に値しない」と評された1篇も除いた。
- 2 この中には翻訳された、つまり純粋に日本語で思考されたものではない、論文も含まれているし、日本人あるいは外国人がKodai等の雑誌に欧文で発表された論文も含まれていることを注意しておく。
- 3 先述したように、2000年代は2000年～2009年のことであり、またこの表には1949年以前の数を含まないため、表1の論文数合計とこの表の合計数とは異なることとなっている。
- 4 古典期は前500年以降フィリッポス2世の死（前336年）まで。アレクサンドロス以降は「ヘレニズム期」として分類している。
- 5 ローマにはこの他に時代別には分類できない「一般」があり、このために時代別の人数を単純に足した数よりも「ローマ史全体」の人数の方が多いということが起こり得る。また、単純に足した数よりも少なくなる

- のは、いくつかの時代にまたがって論文を作成した人がいるからである。
- 6 坂口明「オステシアの船大工 (fabri navales) の組合 (上)」『研究紀要<日本大・文理・人文科学研>』2001、「同上 (下)」2002、「いわゆる「葬儀組合」について」『西洋古典学研究』2002；佐野光宜「葬送活動から見たコレギア」『史林』2006.
- 7 樋脇博敏「『名無しの権兵衛の娘』と自称する女」『史論』<東京女子大>、2000.
- 8 佐野光宜「剣闘士競技とローマ社会」京大 COE「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第5回報告書、2007.
- 9 高橋亮介「テプテュニスのグラフィエオン——属州エジプト農村部における文書行政の一断面——」、豊田浩志編『神は細部に宿り給う』南窓社、2008.
- 10 南雲泰輔「英米学界における『古代末期』研究の展開」『西洋古代史研究』9、2009.
- 11 以下すべての著作を通じて今日の仮名遣いに改め、漢字も今日のものを使うこととする。
- 12 粟野頼之祐『出土史料によるギリシア史の研究』岩波書店、1950、iii-iv。
- 13 「我が国の西洋史研究の水準を超えた名著」「回顧と展望 1950」(三浦一郎)。秀村欣二「書評」『史学雑誌』1950、72-79.
- 14 秀村、「書評」、72.
- 15 粟野、1950、iv.
- 16 高山一十『ギリシア社会史研究』未来社、1970、483-4.
- 17 高山、同書、67.
- 18 例えば、「古代ギリシア市民」冒頭(著作集Ⅱ、189)。
- 19 「アテナイ人イソクラテース」『饗宴』3、1946、「古典古代」『歴史学研究』133、1948、「西洋の起源」『世界』5月号、1948、「羅馬大土地所有制」『社会構成史大系』2、1949、「スパルタ型国家の農業生産者」『史学雑誌』58-3、1949、「ヘロドトスについて」『西洋史学』6、1950、「奴隷制社会」『近代社会の成立』社会科学講座4、1951、「ジョージ・トムソン教授の業績」『思想』323、1951.
- 20 『村川堅太郎古代史論集Ⅲ』岩波書店、1987、331.
- 21 この他に多いのはつぎに出る太田秀通と弓削達のもので、両者で15本を数える。
- 22 これは1954年発表のものであるが(著作集に挙げられている1950年というのは間違い・・・ただし村川はこれの執筆時期を1950年として解説をつけている)、ミケーネ文字解読については何も触れていないし、使われている欧文文献も1951年のものまでに限られている。
- 23 村川著作集Ⅱ、364-5.
- 24 彼自身の言葉を挙げればつぎのようである、「ドーリス人の侵入とこれに続くギリシア人の大移動とによって、ミュケナイ的ホメロスの王国は分裂し、その支配下にあった群小諸王がエーゲ海周辺各地に置いて独立的な成長をとげた時、ここにはじめてポリス世界形成の前提条件が熟したと見るほかない。したがって、暗黒時代は、実は、ギリシア人がアジア的王国と多分に共通性を持ったミュケナイ文明から自己自身を区別し、そのことによってアジア的専制とは違った道を切り開き、固有の国家群の世界として自己の独自性を創造していった時代であった、ということができる。」(『共同体と英雄時代の理論』増補版、山川出版、139頁)
- 25 たとえば、『奴隷と隷属農民』増補版、青木書店、1988では、古代=奴隷制社会とする常識的見解に挑み、奴隷制社会と規定されるのは、「古典期・ヘレニズム期のアテネ型ポリスと、共和政後期から帝政初期にかけて

てのローマ社会とに限定されなければならない」(53頁)としている。

- 26 たとえば、周藤芳幸「ミュケナイ文明とエーゲ海の初期王権」初期王権研究委員会編『古代王権の誕生 IV ヨーロッパ編』角川書店、2003、同『古代ギリシア——地中海への展開——』京都大学学術出版会、2006、3-81など。
- 27 たとえば、フィンリー批判に、「マクス・ウェーバーと歴史学方法論」『歴史学研究』555、1986。
- 28 『地中海世界とローマ帝国』岩波書店、1977、334-5を見れば、この時点でも先の見解を保持していたようである。
- 29 グシュニツツァ以来のこの問題に対する批判と反批判の歴史は、同書12頁以下参照。
- 30 「しかし、『中心-周辺』的把握の要素を導入し、ギリシア・ローマ世界を世界史の中に位置づけ、しかもギリシア・ローマ世界の構造を諸民族の社会構造と国際関係の構造との有機的関連性のもとに捉えようとする、という課題を設定する時、私の試論は、欠陥は多くとも、ほとんど唯一の試みの方向であると考え。」(弓削・伊藤編『ギリシアとローマ——古典古代の比較史的考察——』河出書房新社、1988、23)
- 31 「オストラキスマスと古代民主政——アテネ政治史の一断面——」『歴史学研究』203、1957。
- 32 この年の「回顧と展望」は「政治史・社会経済史の分析に少々平板乃至不十分な部分があるように思われるが」と断りつつも、「大体において妥当な見通しを与えている」と評価している(清永昭次)。
- 33 批判の例は、たとえば1961年の「回顧と展望」83-85(長谷川博隆)。
- 34 岩波講座は第1巻～第3巻がギリシア・ローマに関わる部分である(1969-70)。秀村欣二・三浦一郎・太田秀通編『古典古代の社会と思想——村川堅太郎教授還暦記念——』岩波書店、1969。
- 35 弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ——古典古代の比較史的考察——』河出書房新社、1988、Yuge, T. & Doi, M. eds., *Forms of Control and Subordination in Antiquity*, Leiden etc, 1988。
- 36 桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム：空間・ネットワーク・文化の交錯』山川出版社、2010。

## 【Abstract】

## A History of the Historical Studies of Ancient Greece and Rome in Postwar Japan

Sumio TAKABATAKE\*

This study explores which topics in Greek and Roman history were pursued and debated in postwar Japan. Toward this purpose, each article mentioned in the column “Looking Back and Going Forward,” which appeared every May in *Shigaku-Zasshi* (*Historical Studies in Japan*), was carefully recorded on a computer card. Articles were first classified into three periods—Greek, Hellenistic and Roman; changes in numbers of articles and authors were noted, and each period was examined for interesting trends. Articles were further analyzed chronologically, beginning with the early postwar. These investigations led to detailed summaries of the writings of three scholars prominent in the early period—AWANO Rainosuke, TAKAYAMA Kazuto and MURAKAWA Kentaro. Next, the research trends and views on Greek and Roman history held by OHTA Hidemichi, YUGE Toru and DOI Masaoki—three highly productive scholars of the next generation who tended to consciously employ historical theory and whose main writings date from the latter period through the 90s—are considered.

**Keywords** : Greek history, Roman history, Ancient history of Western world, trends of historical studies, numerical analysis

戦後日本においてギリシア史・ローマ史はどのようなことを問題にし、どのような議論がなされてきたのかを追求しようとした。そのために『史学雑誌』の毎年5月号に載る「回顧と展望」に言及されている論文を丹念にカードに取っていく作業を行い、そこから言えることを考えた。まず、論文をギリシア、ヘレニズム、ローマの3期に分けて数の変遷、著者の数などを分析し、ついで各時期をさらに細分化して言えることをまとめた。ついで、論文を年代順にまとめ、初期の頃から言えることをまとめた。まず、初期に多く現れる栗野頼之祐、高山一十、村川堅太郎の3人について言い得ることをまとめ、ついで、そのつぎの時期から90年代まで多くの論文・著書を著した太田秀通、弓削達、土井正興の3人について研究の傾向とギリシア史・ローマ史への見方をまとめた。

キーワード：ギリシア史、ローマ史、西洋古代史、研究動向、歴史の定量的分析

---

\* A professor in the Faculty of Literature, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University